

Voice 5

ぼいす

2000.9.15

北区飛鳥山博物館だより

紫外線と光熱費に悩まされた日々も去り、
爽涼の風が夏の疲れを癒す長月となりました。
いよいよ二千年秋、今世紀最後のオリンピック
が開催されます。二十世紀の佳境に向けて
華々しい祭典とともに二十一世紀への期
待でわたしたらの胸は躍ります。この記念す
べき年に「ぼいす」も新しく生まれ変わら
ました。

これは何でしょう？
答えは次のページ

エコロジーとエコミュージアム

最近、5、6年になるであろうか、「エコミュージアム」という言葉を、あちこちで目にする。右肩上がりの経済成長が終息し、身の回りの環境への関心が深まるとともに地域の環境と産業・文化資源との協調を指向するエコロジー社会の実現が叫ばれている。本来、このエコロジーという言葉は、ギリシア語のoikos（家）とlogy（学）を語源とし生態学と普通、呼ばれる。これは生態系破壊が深刻化した1960年代以降に盛んに提唱された、自然と人間の関係の再構築化を意味するものであった。その文脈の中で90年代以降、さらにエコロジーを具体化する文化装置としてエコミュージアムという発想が提唱されている。しかし日本経済が低迷し、これがダイレクトに地域に波及する現在、エコミュージアムという概念も環境と人間の新しい関係性の模索と地域文化の発信という理念よりも、直ちに集客数にみる対費用効果と投資の乗数効果といった諸点を与件に単に地域おこしのお飾りとして構想されることが多いようだ。例えば最近、計画の大幅な見直しが決定的な愛知万博（2005年開催予定）が、計画の最初の段階からエコミュージアムを指向していたことはこの問題の深刻さを物語っている。一過性の博覧会ではなく長期的なまちづくりと一体になったシステムを指向する愛知万博が、その基本理念に「自然と生命の語りかけるものに耳を傾け、お互いの呼びかけの中

から、そこに叡知に満ちた新しいインターフェイス」を作り出そうと構想する一方で、海上（かいしよ）の森の大規模な改変と開発を計画したために世界的な批判を浴びた。これは環境の改変が貴重な動植物の生態系を破壊する懸念があり、環境保護団体の批判を受けたほか、また従来型のインフラ整備に他ならなかった実体が露呈され、大幅な計画の変更を余儀なくされたことは耳目に新しい。特に会場全体をエコミュージアムとしてゼロ・エミッション型（完全にサイクルの生産システムの開発計画）のクリーンエネルギーシステムを中心にしたインフラ整備、環境保全を計画しつつも、会場構想において現実的には住宅建設や森の伐採に他ならなかったことを考えるにつけ、いかに現況の環境と折り合った発想が困難な状況にあるかを物語っている。また環境プランナー、展示業者、シンクタンク等の一部に見られるように、単に地域開発計画をエコミュージアムというお化粧で彩ったに過ぎない矛盾した事例も多々見られる。一過性の博覧会だからこそ問題の肥大化と深刻さが表面化されているわけであるが、これが地道な地域博物館の理念において考えてみると、所与の環境と文化がどのような関係性を取り結ぶのかという極めて継続的でアクチュアルな課題となって浮上してくる。

琵琶湖博物館にみる環境学習

こうした状況のなかで環境と人文的・文化との融合を指向し成功した事例として、滋賀県立琵琶湖博物館がある。この博物館は草津市に所在しすでに平

成8年に開館以来、120万人の集客を集めた。ここでは大都市京都、大阪の水源でもある琵琶湖の自然環境と歴史、そして、そこで営まれる人々のくらしをコンセプトに10年に及ぶ綿密な準備の上で開館した。同館は研究・展示の博物館機能を来館者と共に発展する博物館経営を目指し、参加型の活動が特色となっている。さらに湖と人間をテーマに環境への取り組みも積極的で、多数の市民調査員から得られたデータを館の研究、展示に反映させるなど、多彩な館活動を展開している。

飛鳥山博物館の目指すもの

さて北区飛鳥山博物館はその基本構想を「風土郷土博物館」におき、自然環境と人文環境、歴史をシンクロナイズさせた展示、普及活動を指向して開館した。飛鳥山を館名に冠しているのは、単に博物館の立地する地点名称を意味するのに止まらずに、北区最高点である地形とそこに営まれた数万年に及ぶ歴史、また吉宗以降の名所性などを、地形に刻みつけられた環境として外在的に捉えるのではなく、自らの「風土」として内在化するものであった。あらゆる風土は心象風景であり、家郷空間として自らの文化環境を形成している。このコンセプトが開館3年を過ぎ、どのくらい浸透しているのだろうか。実際のところ大いに危惧するところである。平成12年3月、北区飛鳥山博物館運営協議会から本館の事情のあり方について具体的な答申が行われたが、今後、明確なコンセプトの再確認と来館者、学芸員が一体となって地域文化環境を探求していくことが今、真に希求されている。

表紙の写真

「ボート競技用オール」（部分）

オールは1928年のアムステルダム・オリンピックに出場した石井金一郎氏が所有したもので、平成2年北区に寄贈されました。北区豊島で代々醤油醸造業を営み、父親は王子町長も務めるといふ恵まれた環境の中で、同氏はボートに傾倒しオリンピック以外にも国内外の大会で活躍しました。オールの柄には氏のイニシヤ

ルやロンドンのメーカー名などとともに「1928年1月14日」の日付が記されていることから、オリンピック出場に向けてオーダーされたものと思われます。日の丸のコントラストも眩しい2本のオールは、かつてオリンピックの大舞台でどのような水しぶきをあげたのでしょうか。（全長 292.5cm 1対）

常設展示

荒川が溢れたらアナタどうする？

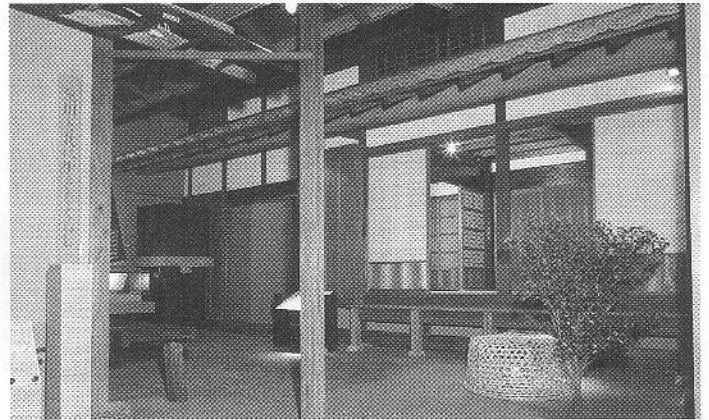
水塚（みづか）というのは、近代まで関東地方の利根川や荒川流域などで広く分布していた建築習俗で、一言でいえば、洪水の難を逃れるために土盛された屋敷地をいいます。近年は住生活の変化によって伝統的な水塚家屋は数少なくなりました。しかし、北区でも昭和30年代までは荒川沿岸の浮間から豊島辺りまでの旧集落で広く見られたのです。

常設展示「荒川と共に生きる暮らし」では、この水塚を疑似体験していただくと思い実物大模型を組み立てました。モデルとなった民家は、おそらく一番新しい時期（といっても明治時代後期ですが）に築造されたと思われる志茂地区に実在したものです。母屋の一部と物置の大半を再現しました。土盛部分は実測値で2.6mの比高があり博物館準備当初は土盛部分を再現するプランも企てましたが、建物の制約上無理ということで見送りました。ただ、古民家が減少した昨今、あの時実現しておけばよかったかなとも思います。

物置の内外に配置してある水害避難用の舟や農具などの生活用具は北区低地部の近代以前の生活文化を示す貴重な資料で、いずれも区の有形民俗文化財に指定されています。母屋の土間に入ると上がり框（かまち）の左側に櫂の大黒柱が赤黒く光っているのが見えます。どうぞ手で触れてみて下さい。頑丈でひんやりとした感触がするこの柱は明治

43年・昭和25年・昭和33年などの東京低地帯を襲った歴史に残る大規模な水害を見てきた証人です。

さて、今年の7月4日に東京地方を1時間当たり82.5mmという観測史上（明治19年以降）2番目の降水量が記録されました（ちなみに1番は昭和14年7月31日の89mm）。こうした豪雨が広い地域で長時間続いたら荒川が氾濫する可能性は十分にあつたと思いますが、これが計り知れない天災というものでしょう。担当者として、常設展示を通して川岸に住む人々の生活の知恵に思いを馳せていただければと思うのです。（中野守久）

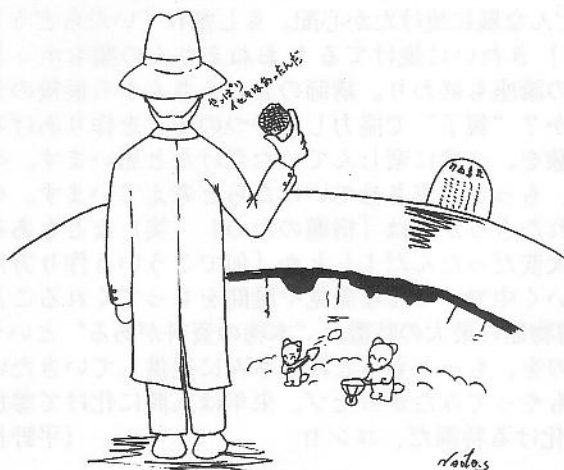


学芸員のエッセイ

ひねもす

● あすかやまにて遺跡発見せり

飛鳥山公園はその全体が飛鳥山遺跡として知られていて、過去に何度も発掘調査が行われてきました。かくいう私も、その発掘調査のいくつかに携わってきた一人であります。その成果は発掘調査報告書にまとめられたり、遺跡発表会などで公表されてきました。（飛鳥山遺跡をテーマにした企画展を企画中です。乞ご期待。）難しい話はこれらに譲り、ここではあまり触れられないことのない発掘のエピソードなどについてお話していきたいと思います。まずは遺跡の発見にまつわ



あすかやま発掘記 その1

るお話から。

昭和12年。飛鳥山公園の中央部にグラウンド造成の工事が行われました。現在の噴水がある広場がグラウンドの名残です。「飛鳥山が平地になりますわい」と嘆く老人の声を聞いた一人の人物がいました。名を篠崎四郎といいます。この篠崎さんは駒込に住んでいた方で、この3年ほど前に飛鳥山で縄文土器の破片を拾ったことがあり、遺跡の存在を気に留めていたようです。はたして飛鳥山に駆けつけると、切り崩し作業の進む現場ではたくさんの土器が出土し、切り崩された崖面にはいくつかの住居址の断面が現れているのが見てとれました。篠崎さんはこの重大さに気がつき、連日公園を訪れては土器を採集しました。しかし、このことが新聞に載り、どこからか野次馬が集まり工事現場は大混乱となったそうです。そのため中への立ち入りを篠崎さんも禁じられ、採集を断念せざるをえなくなったそうです。その後、篠崎さんはこの一連のことをまとめ、出土した資料の紹介を含めて誌上发表しました。ここに飛鳥山に遺跡があることが学会をはじめ、広く知れわたることとなったのです。篠崎さんが飛鳥山を気に留めていなければ、そして工事現場で丹念に土器を採集していなければ、その後の発掘調査はなかったかもしれません。この昭和12年の出来事こそ飛鳥山発掘にいたる、はじめの一步なのです。

（鈴木直人）



親子土器づくり 7/23 sun

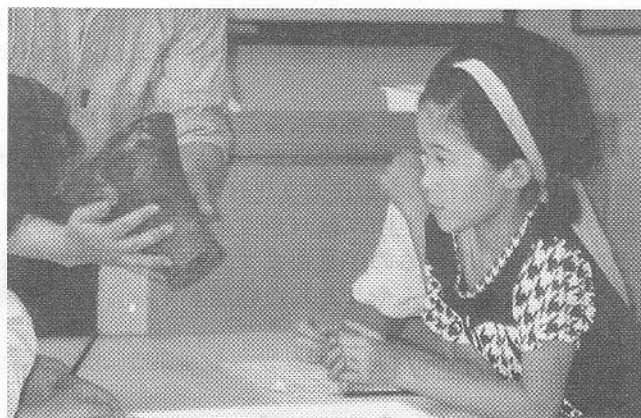
コン吉の

『夏休み土器づくり教室 親子土器づくり』見学記！

オイラは飛鳥山をめぐらしている山野コン吉。毎年夏休みになると、博物館で『土器づくり教室』なんておもしろいことをやっているらしい。もー、これはどんなものかオイラが目でたしかめなくっちゃ。そこで『夏休み土器づくり教室 親子土器づくりコース』をこっそり見学だ！小学1～3年生の児童とその保護者がペアになって「自分たちだけのオリジナル縄文土器を作ろう！」というのがこの講座のテーマらしい（ちなみに「こども土器づくりコース」もある）。そうはいつでも“縄文土器”ってどんなものだ？オイラもよく分からないが、小学生には難しいゾ、などとやっているとおおっ、目の前に区内から出土したというホンモノの縄文土器が登場だ!!思わず「ワーッ」という声に参加者からもれている。さらに、その土器を一人ひとりにさわらせている!!参加者の多くは縄文土器を間近に見るのも初めてなら、まして実際に“さわ”なんてことは初体験。『ホントにさわっていいんですか?』『ざらざらしてるー!』など、部屋の中はちょっと興奮気味。

みんな、縄文土器を体で感じられたところで、いよいよ土器づくりに挑戦。講師のおねえさんのあとに続いて、粘土のだんごをつぶして底を作って、その上に

紐状の粘土を輪にして積み上げている。フムフム、こういう作り方を「輪積み」方法というのか。今日は、土器を形作って文様を施すまで。オー、思い思いの形、文様に出来上がった土器を前に、みんな満足げだな。どうやらこれを陰干しして乾燥させた後、焼くらしいゾ。本当ならば「野焼き」だが、ここでは電気ガマで一昼夜かけて土器を焼くのだとか。『ちゃんと焼けるかなー?』の声に、講師の責任は重大だ!みんなの手に焼き上がった土器が戻るのには1週間後なのか。オイラもまたその時こようと。

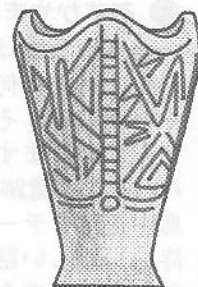


ホンモノの土器を前に少しキンチョーしてるかな?

ちょっと失礼して

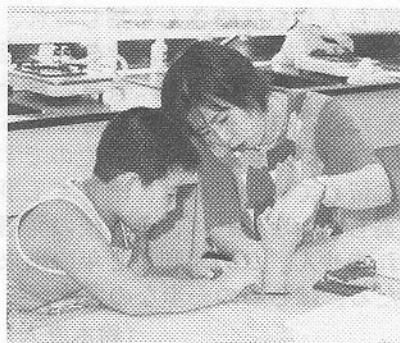
参加者の声を盗み聞き!

さて、今回土器づくりをやってみて、みんなどんな感想を持ったのかな?聞き耳をたててみる。『とっても楽しかった!』『またやりたい!』フムフム。みんな簡単にできちゃったのかな?『思ったよりむずかしかったネ。』オイラが見る限り、紐を作って重ねるところなんてみんな苦労していたナ。あと、ひび割れができてきちゃって、それを直すところなんかも。『本物の土器に触れてよかったね。縄文人の気分でもっと楽しく作れたし。』あっ、あのお母さん、講師のおねえさんに何か話してるゾ。『…良い記念になりました。こんな風に作っていたのかとはじめて納得して、大人も良い経験をさせていただきました…。』へー、大人も勉強になったのか。



ドキドキの返却日!? (失礼…)

土器だけに



今日はいよいよ土器をみんなに返す日だ。みんなはもちろん、ハラハラ、ドキドキだろうけど、オイラもどんな風に焼けたか心配。もし割れていたらどうしよう。あっ、みんな割れてないゾ!きれいに焼けてる!おねえさんの顔もホッとしてるみたいだナ。いよいよこの講座も終わり。講師のおねえさんから最後のお話だ。『みなさん、いかがでしたか?“親子”で協力して一つのモノを作りあげる。普段ではなかなかできない体験を、一緒に楽しんでいただけたと思います。今後は親子で参加できる催し物を、もっと充実させていけたらと考えています。今回みなさんがこの講座に参加されたきっかけは「宿題のため」(笑)などもあるかもしれませんが、「昔の人は大変だったんだ!」とか「何でこういう作り方だって分かるの?」とか、やっていく中でいろんな発見や疑問をもってくれることが何より大事なことです。博物館の最大の特徴は“本物の資料がある”ということ。本物からしか味わえないものを、もっともっとみなさんに提供していきたいと思っています。』うーん、オイラもやってみたかったゾ。来年は人間に化けて参加してみようかな?そのためには化ける特訓だ、コン!!

(平野祐子)

収藏品のご紹介 船方神社のボンゼン

今年7月20日の猛暑のなか、浮間の氷川神社で「万垢離（まんごり）」という行事が約60年ぶりに復活しました。万垢離の主役は丸太棒にくくりつけた藁束に御幣を挿したボンデン（ボンテン）です。神の依り代であるボンデンを川の中に立てて水をかける「川みそぎ」を行い、水難防止と家内安全を祈願します。

万垢離と同じような行事は、かつて堀船の白山神社や船方神社でも行われていました。堀船ではそのものズバリ、「ボンゼン（ボンテン、ボンデン）」という名の行事です。ここでも大正期を最後に行事は絶えていますが、昭和55年6月28日船方神社で水神宮が建立された際に再現されました。そのとき作られたボンゼンが当館に残されています。

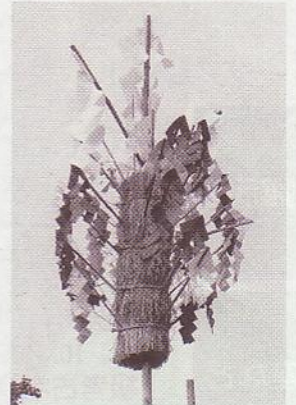
ボンゼンは棒の長さ約4m、藁束の長さが約1mという大きいもの。御幣は浮間では赤、黄、緑の三色でしたが、堀船のボンゼンは白・赤・青・黄・紫の5色です。また藁束の先端には大きな白の御幣が2本挿してあります。浮間ではその中央に「大山阿夫利神社」（神奈川県伊勢原市、雨乞いの霊山・大山の本社）と書かれたお札も挿してあります。

船方神社でボンゼンが行われていた日は明らかではありませんが、白山神社では5月15日だったと言いますから同時期と思われる。裸の男衆がボンゼンを担ぎ、「婦命頂礼懺悔懺悔六根清浄（きみょうちょうらいさんげさんげろっこんしょうじょう）」と唱えながら川に入り水をかけあうのですが、5月の川の水はまだ冷たかったことでしょうか。川みそぎのあと、氏子はボンゼンの御幣を悪魔退散の護符として持ち返って家の庇にさし、ボンゼンは川に流されます。

浮間でも堀船でも荒川の治水・整備とともにボンゼンの行事が消えていきました。かつて浮間では「浮間の渡し」があった付近（現在の新河岸川）で川みそぎを行っていましたが、今年の万垢離では約3km離れた荒川緑地公園まで移動を強いられました。船方神社で復活したときは川に入ることはできず、川の水をかけるに留めたということです。川に流されなかったボンゼンは、人々の祈りをたたえつつ、今はひっそりと博物館に収められています。



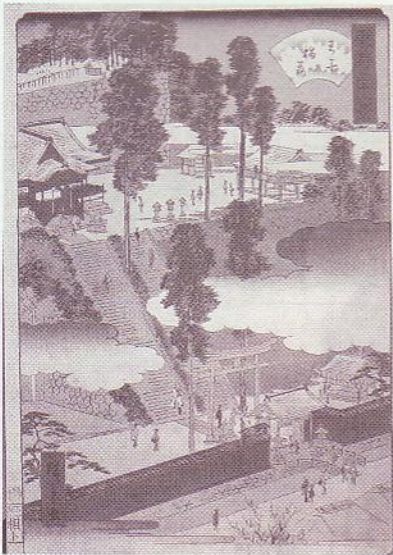
浮間の万垢離（今年7月20日）



船方神社のボンゼン

あみぎ

王子稲荷の石垣



東都三十六景 王子稲荷 歌川広重（二代）

2月の初午で有名な王子稲荷は、すでに近世初期の寛文2年（1662）に版行された『江戸名所記』によると関東稲荷社の「棟梁」とされています。しかし江戸の庶民にまでひろく王子稲荷が注目されたのは、18世紀中期以降のことです。度重なる稲荷の開帳は御利益を求める庶民の身近な願いを求めるに対応して頻々と開かれました。「近年殊に靈験あらたかにて、毎月午の月の参詣、引も切らず」（『絵本江戸みやげ』）といわれるように、2月どころか毎月、多くの参詣者が賑わう江戸の流行神となりました。

さてみなさん、王子稲荷本殿背後に切り立つ高い石垣があることをご存知ですか。カミソリの刃も入らないほどびったりとつながり合わされた切石積みの様子は、さながら大規模な近世城郭の石垣のようです。これは18世紀の後半に江戸の豪商をはじめとする多くの崇敬者によって寄進されたものです。第2代大和郡山藩主であった風流隠居大名、柳澤信鴻の日記によると安永7年（1778）ごろから「石数多集め普請の様子」とあり（『宴遊日記』）この頃盛んになった王子稲荷信仰を背景にしたことがうかがわれます。ところで築城技術のピークは元和の一國一城令以前の慶長年間（1596～1615）といわれます。このことは本来、軍事技術だった石垣づくりが「民生用」のインフラ基盤として転換するのに約150年の時間が必要だったこととなります。この高い石垣は私たちに近世という時代のひとつの側面を物語っているともいえましょう。

（石倉孝祐）

Q & A Q：学校の勉強に博物館は役立つの？

A：博物館には毎年多くの学校見学があります。今後、より多くの子どもたちが博物館を利用し、親しんでもらうために、学芸員と学校の先生が集まり、博学連携委員会を行っています。すでに常設展示の子ども用解説シートの作成についてや、新しいタイプの授業「総合的な学

習の時間」に向けて博物館がどのように関わっていかれるか話し合いが行われています。民具学習のワークショップも計画されており、博物館ならではの実物を使った学習に対して学校現場から熱い期待が寄せられています。

お知らせ

「ばいす」は、博物館の声そして、利用者の声の双方を指します。新しくなった「ばいす」では皆さんからの声をお待ちしています。「ばいす」への感想・意見・要望などを気軽に博物館までお寄せ下さい。

〒114-0002 東京都北区王子1-1-3 TEL03-3916-1133 北区飛鳥山博物館

閲覧コーナーから 「調査のためのツール本」

閲覧コーナーには、北区の歴史や地理などに関する様々な質問が子どもや大人の方から寄せられます。自分で調べたが、もっと詳しいことを知りたいと相談してくる方もいます。調査目的に合った図書を迅速に探し、回答を見つけることは実はなかなか難しいことなのです。

閲覧コーナーでは調査に役立つ参考図書(辞書・事典・目録類)を多数用意しています。子ども向けの図書は図版や写真が多く理解しやすい内容となっています。大人の方には歴史・民俗・考古・自然の各分野の専門事典があり、歴史を例にすると総合的な「国史大辞典」から「日本史小百科」のような項目別の中事典、論文をまとめた専門書まであり、必要の程度により使い分けることができます。また色々な博物館が出版している、紀要・年報・展示図録や一般雑誌のバックナンバー・学術雑誌といったものも大変有用で、パソコンの図書資料検索で、何が収蔵されているか調べることができます。今後さらに辞書などのツール本を拡充していく予定です。皆さんの本探しのお手伝いができ、北区のことが何でも分かる閲覧コーナーでありたいと思っています。(岩崎みどり)



パソコンで民俗資料を見る親子

ミュージアム・カレンダー 2000年10月～2001年3月

特別展示室	10月	11月	12月
	特別展「岳人 冠松次郎展」 10/1(日)～11/30(木)		企画展「奥山峰石展(仮称)」 12/14(木)～1/14(日)
講座など	再発見・年中行事を知る講座 10/15(日)～11/26(日)全4回 上級考古学講座「考古学の世界」 10/21(土)～11/18(土)全5回 特別展 スライド上映会 22(日)	特別展 山岳映画上映会 3(祝) 映画上映会(予定) 19(日) ビジュアル講座2000 25(土)	
特別展示室	2001年1月	2月	3月
	自然史講座 1/19(金)～3/9(金)全8回 ビジュアル講座2000 27(土)	初級考古学講座「考古学をはじめよう」 2/11(日)～2/25(日)全3回 江戸名所図会を読む 2/3(土)～3/31(土)全5回	ビジュアル講座2000 24(土)
講座など			

利用のご案内

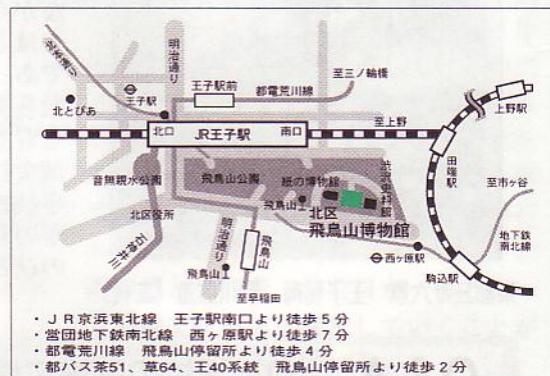
【開館時間】
午前10時00分～午後5時
(有料の展示室への入場は午後4時30分まで)

【休館日】
毎週月曜日(国民の祝日・振替休日の場合は開館)
年末年始(12月28日～1月4日)
国民の祝日および振替休日の翌日(土曜・日曜日の場合は開館)このほかに臨時休館日等があります。

【常設展観覧料】

	個人	団体
一般	300円	240円
小・中・高	100円	80円

- ・小学生未満は無料
- ・団体扱いは20名以上
- ・三館共通券は当館のほか、渋沢史料館、紙の博物館の3館をごらんになれます。(一般720円小中高320円)



編集後記

「ほいす」が今年で創刊3年目を迎えるにあたり、全体の見直しを行いました。4月から討議を繰り返し、利用者の方がもっと親しめる紙面づくりについて、初心に戻り再考してみました。そして博物館の事業が集中する8月を目の前に、多忙なスケジュールの合間をぬって少々ばて気味のスタッフ達が、腕をふるって書いてくれました。編集の予想を覆す個性的な原稿たちは、

スタッフおのおのの色が際立ち筆者の顔が見えてきます。私も今回、編集の難しさを痛感し、創ることは常に流動的で、思いもよらぬものが生まれる所に面白さも苦労もあることを知りました。次回は編集者として引っぱっていただけるよう、そして「ほいす」も徐々に定番の形に近づけていきたいと思っています。新生「ほいす」をどうぞよろしく願いたします。(岩崎みどり)

北区飛鳥山博物館だより ほいす Vol.5

発行 平成12年9月15日
編集 北区飛鳥山博物館
〒114-0002 東京都北区王子1-1-3
TEL.03-3916-1133
発行 東京都北区教育委員会
〒114-0022 東京都北区王子本町1-2-1
TEL.03-3908-1111(代)
印刷 (株)内国社印刷所